

# Gung ru rGyal mtshan bzang po の生涯と著作

小林 守

## はじめに

クンル・ギェルツェンサンポ (Gung ru rGyal mtshan bzang po, 1383-1450 ; 以下, ギェンサンワ rGyan bzang ba と略) は, ツォンカパ (1357-1419) の直弟子にして第3代セラ寺座主をつとめたゲルク派の論師である。彼の所説として, 経量部・唯心形象真実派共通の下位区分とされる多様不二等の3派を“斑の認識”の比喻を用いて差異化する説明の仕方が有名で, 筆者もかつてチベット人によるインド唯心派の分類の問題を扱った際にそれを取り上げたことがある<sup>1</sup>。30年ほど前のこと, 当時はギェンサンワの著作そのものを参照することはできなかったが, 2007年にギェンサンワの著作が活字洋装本の『著作集』3巻 (rGyan bzang gsung 'bum) として出版されたことにより, 今や後代の諸論書に言及引用される彼の所説を, 彼の著作そのものにおいて確認することができるようになった。

そこで, 最近公表した2つの論文で筆者は, ギェンサンワの著作そのものに当たって, 彼の中観思想に関わる幾つかの見解を検討した<sup>2</sup>。ギェンサンワは彼自身の師であるツォンカパの見解に対して批判的な異説を提示したため, すでに彼の在命中, 彼の中観説は彼の同時代人であったツォンカパ二大弟子の一人ケドゥブ (1385-1438) によって批判されたことが知られている。その後も, 彼の所説は, セラ寺系のセラ・ジェツンパ (1469-1544) と, テンパタルギェー (1493-1568), そしてデブン寺系のパンチェン・ソナムタクパ (1478-1554) と, ジャムヤンシェパ (1648-1722) というゲルク派の教科書 (yig cha) 作成者たちによって, 繰り返し批

---

<sup>1</sup> Cf. 小林[1988:105]; 後注 48, 49.

<sup>2</sup> Cf. 小林[2014][2016:12-17].

判された。

後代のセラ・ジェツンパ等による批判など、ギェンサンワが知る由もないが、伝承によると、彼は同時代人であるケードゥブによって叱責批判されたのがショックで、彼（ギェルツェンサンポ）が作ったとされる、

大多数の人々は名声に従う。

ロサンタクパは兜率天に往生された。

チャムチェン・チュージェは皇帝の頂飾となった。

ギェルツェンサンポはこの雪山国に残っている<sup>3</sup>。

という自己の不遇を嘆き哀しむ歌（*thugs 'byung ba'i mgur*）が伝えられている。真相はどうであれ、上の“哀しみの歌”からは、他者の成功を見つつ一人取り残された思いに悄然とするギェンサンワの様子が伝わってくる。さらにその没後、ツォンカバ説との不一致のゆえに彼の著作は顧みられなくなり、その著作の彫られた版木が燃やされもしたという不幸な話も伝えられている。

ギェンサンワはこのようにセラ・ジェツンパやソナムタクパ等のようなゲルク派の教科書作成者という点で謂わば正統派の諸論師によって批判され続けた点において、彼にはゲルク派の異端論師という側面がある。しかしギェンサンワの異説ゆえに、われわれから見ると、ゲルク派思想史が変化に富みより内容の豊かな展開を示したと言えなくもない。“哀しみの歌”にさそわれたわけでもないが、本稿では改めてギェンサンワの生涯と著作を整理しておくことにしたい。

## 1 ギェンサンワの生涯

ギェンサンワの詳しい伝記は現在のところ入手できないが<sup>4</sup>、彼の略伝は、筆者の参照し得た歴史的な資料では以下のものにみられる。

<sup>3</sup> *bKa' gdams gsar rnying*, M111a2-3 (p.229), C139,3-6 : mi rnams phal cher grags pa'i rjes su 'brang// Blo bzang grags pa dGa' ldan gnas su gshegs// Byams chen chos rje mi dbang gtsug na mdzes// rGyal mtshan bzang po Gangs ri'i khrod 'dir lus// Cf.第1節「ギェンサンワ略伝：ケードゥブとの対立」。

<sup>4</sup> ロンドルラマは「ギェンサンワ伝12枚」を報告している。 Cf. *Klong gSung 'bum dkar chag*, C604, 5-6, D(Ra)47b6 (p.1378) : Gung ru rGyal mtshan bzang po'i rnam thar la bcu gnyis/

Las chen Kun dga' rgyal mtshan (1494 年<sup>5</sup>) 作『カダム派明灯史』*bKa' gdams chos 'byung*, 378a1-4.

Pañ chen bSod nams grags pa (1478-1554) 作『新旧カダム派史』*bKa' gdams gsar rnying*. M110a4-112a6(pp.227-231), C138-139.

sDe srid Sangs rgyas rgya mtsho (1653-1705) 作『ゲルク派黄瑠璃史』*dGa' ldan chos 'byung*, p.138,15-25.

Sum pa mkhan po Ye shes dpal 'byor (1704-1788) 作『パクサムジョンサン史』*dPag bsam ljon bzang*, p.247,8-15.

ほかに、辞典類では『雪域歴代名人辞典』(*Gangs can ming mdzod*, pp.259-260) と『東噶藏学大辞典』(*Dung dkar tshig mdzod*, pp.518-519) 等、さらに『著作集』冒頭 (*rGyan bzang gsung 'bum*, pp.1-3) にも略伝が掲載されているが、ここでは著者の明確な歴史的資料のうち最も詳しくギェンサンワの生涯を伝えるパンチェン・ツナムタクパ作『新旧カダム派史』(1529 年作) 所収の略伝を以下に訳出することにする<sup>6</sup>。

### 1.1 『新旧カダム派史』「略伝」

〔出生〕ツウンメー・チュージェ (mTshungs med chos rje, 無比なる法主, クンル・ギェルツェンサンポ) は, “水の女の豚” (1383 年) に, lHo rong stod<sup>7</sup>においてお生まれになった。ジャムヤン・チュージェ<sup>8</sup>がお生まれになってから4年経ち、これから2年経った“木の牛” (1385 年) それはケードゥブ法主<sup>9</sup>のお生まれになった年でもある。

<sup>5</sup> 著作年については、羽田野[1954:53]参照。

<sup>6</sup> ツルティム/藤仲[2001:19]に『パクサムジョンサン史』, 西沢[2011:548-549]に『新旧カダム派史』等により、ギェンサンワの略伝が紹介整理されている。

<sup>7</sup> 出生地は、他書では「Gung ru stod」「mMo khams Gung ru stod」「mDo stod lHo rong」「mDo stod lHo rong Gung ru'i yul」とあって、一致しない。ほかに、出版された『中観千葉』奥書 (BMTT, p.350) に「mDo khams stod pa rGyal mtshan bzang pos」とある。 Cf.西沢[2011:555,n.2317]。

<sup>8</sup> 'Jam dbyangs chos rje bKra shis dpal ldan, 1379-1449. ジャムヤン・チュージェは、ツォンカパの直弟子で、特にデブン寺 ('Bras spungs) を建立したことで有名。 Cf.ツルティム/小谷[1986:21-23]。

<sup>9</sup> mKhas grub chos rje dGe legs dpal bzang, 1385-1438.

〔**修学**〕ウ地方（中央チベット）に行かれてから、ツォンカパ<sup>10</sup>や、チャンセム・ラデンワ<sup>11</sup>等に親近して学説を学ぶことにより、学者の王となった。

〔**受戒**〕ツォンカパが戒師を、ドゥルジンバ<sup>12</sup>が羯磨師を、ギェルツァブ法主<sup>13</sup>が屏教師をなさって、具足戒を受けた。

〔**サンブ時代**〕かつてサンブのベセル学堂<sup>14</sup>において釈説・聴聞をなさっていたとき、クンル・ギェルサンという令名で四大洲は満ちた<sup>15</sup>。

〔**他者との論争**〕Chen po Dwags po や、Slob dpon dGe rgyal<sup>16</sup>等を、聖教と正理によって打ち負かしたことによっても、令名はますます広まった。〔彼は〕「私には十人の在家者のなかで回向の話をするよりも、百人のゲシェーたちのなかで〔仏教の諸問題をめぐって〕議論を投げかける方が容易である」と、笑い話さえもおっしゃっていたようである。

〔**セラ寺座主**〕その後、〔サンブの〕ベセル学堂の任務を果たされて、数年のあいだ隠遁と釈説・聴聞をなさってから、セラ大寺にやっ来て来られて、〔セラ寺と〕ツンモツェル寺との2つを執りしきられて<sup>17</sup>、約30年のあいだ、一般的には多くの

<sup>10</sup> rJe rin po che : Tsong kha pa Blo bzang grags pa, 1357-1419.

<sup>11</sup> Byang sems Rwa sgreng ba Shākya bsod nams, 1357-1442. チャンセム・ラデンワは、ツォンカパの直弟子で、サンブ寺ベセル学堂の第2代学堂長をつとめた人物。Cf.西沢[2011:549,n.2282]. ここには触れられていないが、*Klong sKyes bu mtshan tho*, C372,12, D(Za)10b2(p.1169)では、ギェンサンワは、ツォンカパの直弟子とされるほかに、セラ寺を建立したチャムチェン・チュージェ (Byams chen chos rje Shākya ye shes, 1354-1435) の直弟子の第一にあげられる。

<sup>12</sup> 'Dul 'dzin Grags pa rgyal mtshan, 1374-1434. ドゥルジンバはツォンカパの弟子の1人で、ツンモツェル寺 (bTsun mo tshal) を建立。Cf.*dGa' ldan chos 'byung*, pp.165-166 ; *Gangs can ming mdzod*, pp.886-887 ; *Dung dkar tshig mdzod*, pp.1148-49.

<sup>13</sup> rGyal tshab chos rje Dar ma rin chen, 1364-1432.

<sup>14</sup> テキスト M(110b1) “gsang phu se ser” 下線部は、C(138,10) “sbe” に訂正。Cf.*bKa' gdams gsar rnying*, 110b3 : de nas sBe ser gyi thugs khur bskyangs te. 西沢[2011:549,n.2283]参照。

<sup>15</sup> 『新旧カダム派史』に “mTshungs med chos rje” という異名の由来の説明がないが、『ゲルク派史』にこうある—「サンブのベセル学堂の釈説・聴聞を行われ、聖教と正理を論じる者のなかで並ぶべきものがいなかったため、“mTshungs med chos rje (無比の法主)” として有名」(*dGa' ldan chos 'byung*, p.138,18-19 : gSang phu sBe ser gyi 'chad nyan mdzad/ lung dang rigs pa smra ba la mtshungs pa med pas mTshungs med chos rjer grags/)。

<sup>16</sup> テキスト M(110b2) “dGe rgyas” 下線部は、C(138,11) “rgyal” に訂正。“dGe rgyal” は “dGe legs rgyal mtshan” を略したもの。Cf.*Dung dkar tshig mdzod* : Chen po Dwags po ba dang/ Slob dpon dGe legs rgyal mtshan gnyis rtsod pas pham par mdzad/

<sup>17</sup> ギェンサンワは、師チャムチェン・チュージェ建立のセラ寺の第3代座主。Cf.ツルティム/小谷[1986:23-25]. 又、ツンモツェル寺は、前述のドゥルジンバ建立の寺。ギェンサンワが同寺の住持をつとめたことは『ゲルク派史』(*dGa' ldan chos 'byung*, p.166,14-15) に出ている。『著

偉大な仏言と、特に中観テキストの説明を正しく行われた。

〔著作〕『プラマーナ論書・学者の悦びを生ずる』、『般若注』、『中論』、『入中論』の小注、『千葉』等を著すことを通して<sup>18</sup>、教え（仏教）のために務めを果たされた。

〔ケードゥプとの対立〕それも、『千葉』において〔ツォンカパによる説明を示した後に自説を示すために〕「あるいは (yang na)」とおっしゃった上で、2つの中観の大注釈（ツォンカパ作『中論注』、『入中論注』の2つ）のお言葉を越えた教義を少しばかり作られた<sup>19</sup>。これらのことからケードゥプ・リンポチェはお喜びにならず〔ギェンサンワを〕叱責なさり、〔彼からの〕敬礼をお受けにならなかったようである<sup>20</sup>。この点について心に留め置いて法主（ギェンサンワ）も、

大多数の人々は名声に従う。

ロサンタクパは兜率天に往生された。

チャムチェン・チュージェは皇帝の頂飾となった。

ギェルツェンサンポはこの雪山国に残っている<sup>21</sup>。

---

作集』所収略伝 (pp.1-2) にもこうある—「〔ギェンサンワは〕その後、セラの第3代座主に就任した。トゥパ学堂 (sTod pa grwa tshang) を建立した。ドゥルジン・タクパギェルツェンがお亡くなりになった後、ツンモツェル寺と大僧院（セラ寺）の2つを執りしきることにより法を説かれた」。なお、セラ・トゥパ学堂の創設者については異説がある。後注 35 参照。

<sup>18</sup> ここにあげられている5著作のうち『プラマーナ論書・学者の悦びを生ずる (Tshad ma'i bstan bcos mkhas pa dga' bskyed)』は、次節で検討する「ギェンサンワ著作リスト」(21)に、『般若注 (Phar phyin gyi tikka)』は(15)、『中論』、『入中論』の小注 (rTsa 'Jug gi tik chung) は(5)と(10)、そして『千葉 (sTong thun)』は(1.3) (所謂『中観千葉 (dBu ma'i stong thun)』)にあたるだろう。

“stong thun” という語が分かりにくい、ツルティム/藤仲[2001:41]の解説に、「トントゥンという語義は一つの書を順序だてて説明するのではなくて多くの書の難処を探って、一服（一包）の薬のように一個ずつまとめて説明するから、千葉（トントゥン）という」とある。「千葉」の和訳はこれに依った。ギェンサンワの所謂『中観千葉』の内容も、中観説の体系的な論述ではなくて、諸論書にみられる否定対象の確認や、空性論証の方法、いわゆる八難処などの中観の難解な諸問題の説明、である。

<sup>19</sup> ギェンサンワがツォンカパ説（「チャンドラキールティ（月称）の自説において実世俗・邪世俗は区別されない」）に準じた説明を行った後に、「あるいは (yang na)」と前置きして、独自の解釈を示す例は、次のとおり—BMTT, p.262,4-6 : yang na dogs pa'i gnas gzhan zhig brjod par bya ste/ 'di ltar/ Zla ba grags pa rang lugs la yang dag pa'i kun rdzob dang/ log pa'i kun rdzob bzhed do// ; 和訳：「あるいは他の疑念のある問題点を述べることにしよう。すなわち、月称は自説において実世俗・邪世俗をお認めになる」。Cf.小林[2014:103]。

<sup>20</sup> ケードゥプは中観の大著『千葉大論 (sTong thun chen mo)』において「ギェンサンワは言う」とか、「ある人は言う」という具合に、批判されるべき前主張者を明示しないが、同書にはギェンサンワ批判が明らかに認められる。Cf.小林[2014][2016]。

<sup>21</sup> この“哀しみの歌”は、『パクサムジョンサン史』(dPag bsam ljon bzang, p.247)にも引用される。第2句の“ロサンタクパ (Blo bzang grags pa)”は、言うまでもなく、ツォンカパのこと。

と、哀しげな歌を詠われた、というのが有名である。それも、[私は]意図的に所化の人々の関心をもつ事それのみを示しただけであって、実際には、ケードゥプ・リンポチェが衷心より叱責なされたことや、法主（ギェンサンワ）が[それを]銘記しなされたということが、どうしてであろうか。（実際にはそのような出来事はなかったのである。）聖者マハー・カーシャパとアーナンダのように<sup>22</sup>。

〔**功德**〕この法主（ギェンサンワ）の偉大な功德も、寢室のストーブを使うのを除いて財産のほとんどをお布施した、離辺中観の見解を受持なされていた、菩提心の宝に精通していた等、稀有なるものである。

〔**臨終**〕このように教え（仏教）のために為すべき事柄を広く護持してから、68歳、“鉄の男の馬”（1450年）の蔵暦7月上分の10日に、ほかならぬセラ寺の寢室において、稀有なる兆しを伴って、お亡くなりになった。ジャムヤン・チュージェが亡くなられた翌年である。

〔**遺体**〕ご遺体は完全にましまして、今に至るまでも舍利がたくさん出てくる<sup>23</sup>、そして魔（病魔）の劇痛に苦しむ人が<sup>24</sup> [それを] 拝謁するだけで病魔は鎮まり得る等、加持力は不可思議である。

---

第3句“Byams chen chos rje mi dbang gtsug na mdzes//”は、前注11で触れたチャムチェン・チュージェが、ツォンカパの名代として中国北京に赴き、明の皇帝の師となったことをいう。ツルティム/藤仲[2001:19]参照。

<sup>22</sup> 「マハー・カーシャパとアーナンダのように（'Od srungs chen po dang Kun dga' bo bzhin no）」というのは、仏滅後の第一仏典結集を主催したマハー・カーシャパ（摩訶迦葉）が、いまだ有学であったアーナンダ（阿難）に対してその諸罪過を叱責し、それに奮奮してアーナンダが阿羅漢位を得て、結集に参加したという故事をうける。Cf.赤沼[1981:17-21]。だが、文脈からみて、ここでソナムタクパは、マハー・カーシャパとアーナンダの上の故事も単なる伝承で、実際の出来事ではないとみているのかと思われる。ソナムタクパ自身、自己の中観論書（1528年作『中観概論』及び1531年作『中観考究』）においてギェンサンワ説を批判しており、そして彼は彼以前に既にケードゥプが「書物のなかでギェンサンワ説を批判した」ことも知っていたに違いない（cf.小林[2014]）。しかしここ『新旧カダム派史』では、当時よく知られていた伝承をふまえて、ケードゥプがギェンサンワを叱責し、その結果ギェンサンワが気落ちしたことを記したが、実際にはそのような「面と向かって叱責した」という出来事はなく、人々の関心をひきそうな伝承を示しただけとするのだろう。

<sup>23</sup> テキスト“ring bsrel mang du 'dzag pa”のうち“'dzag pa”は、『蔵漢』に「'bab pa'am/ lung ba/ 'dzir ba」と説明されている。北村[1962:13]に“khyi so la ring bsrel mang po babs”が「犬の歯に舍利がたくさん出てきました」と和訳されているのを参考にした。「舍利がたくさん出てくる」というのは、瑞相か。

<sup>24</sup> テキスト M “gdon gyis gzer ba'i mis” 下線部は、C “gzir” を採った。

〔弟子〕そこで、三蔵を持するご子息（弟子）が数多く現われた中で大変有名な者として、次の人らが現われた<sup>25</sup>。

- (1) Ye shes mgon po'i grub chen bla ma Phyag drug pa<sup>26</sup>
- (2) Chos rje dPal seng ba (黄 mKhas grub dPal ldan seng ge ; 著 gSang phu ba dPal ldan seng ge)
- (3) Chos rje Rin byang pa (黄 Chos rje Rin chen byang chub ; 東 sGo mang mkhan po Gung ru Rin chen byang chub)
- (4) Chos rje Kun legs pa (雪 Kun dga' legs pa)
- (5) Drung sKal bzang rtse pa
- (6) Chen po Byang 'bum pa (四 Kun mkhyen Byang chub 'bum or Byang chub 'od zer)
- (7) Sher rgyam pa (黄 Chen po Shes rab rgya mtsho)
- (8) Chen po g.Yu ba (新/黄 g.Yu pa brTson 'grus bzang po)
- (9) 'Jam 'phags pa (四'Jam dbyangs 'phags pa)
- (10) Slob dpon Rin rgyal ba
- (11) Chos blo ba (新/黄 Gung ru Chos blo)
- (12) Slob dpon Tig gu (C Ti gu) g.yag mgo
- (13) Za ru Shāk bkras (新 Slob dpon Shāk (C Shākya) bkras pa ; 黄 Slob dpon Shākya bkra shis pa)
- (14) Bya btang Shar lung pa
- (15) Shāk bzang pa (黄 Slob dpon Shākya bzang po)
- (16) dKa' bcu ba Kun dga' don grub

---

<sup>25</sup> 以下のリストでは、はじめに『新旧カダム派史』「略伝」にある名をそのまま示す。括弧内は、『新旧カダム派史』のうち今の「略伝」以外の個所に出ている名（「新」と略）と、『ゲルク派黄瑠璃史』（「黄」と略）と『四大寺及上下密院史（*Grwa sa chags tshul*）』（「四」と略）に出ている名を記し、ほかに『雪域歴代名人辞典』（「雪」と略）、『東噶蔵学大辞典』（「東」と略）、『著作集』略伝（「著」と略）に出ている名を挙げたケースもある。なお、西沢[2011:549]にギェンサンワの弟子が扱われている。

<sup>26</sup> *dGa' ldan chos 'byung*, p.176,8 に、ペンユル（'Phan yul）にある諸寺の解説のなかに、*Bla ma Ye shes mgon po* の名がみえる。この人物が関係するののか。

(17) Zhol smon (C Zhol smyon)

(18) mKhan po Grags 'od pa (黄 Ri kha bla ma Grogs 'ong ba ; 東 Kong po Ri kha  
dgon gyi bla ma Grags pa 'od zer)

(19) gZhon dkon pa (黄 Pu to bla ma gZhon nu dkon cog)

(20) Bla ma Nam mkha' dbang phyug

(21) rGyal mchog pa (黄 dPung mkhar bla ma rGyal mchog pa ; 東 Kong po sPungs  
mkhar dgon gyi bla ma rGyal mchog pa)

(22) Slob dpon Kre rings (新/黄 Kre ring(s) Blo gros rin chen)

(23) Blo gros seng ge ba

(24) Bla ma Sangs rgyas tshul khirms (黄 'Brong steng bla ma Sangs rgyas tshul  
khirms)

(25) Byi'u gnas brtan pa (黄 Bye'u gnas brtan Blo bzang nyi ma)

これらのなかで(14)Shar lung pa は、隠棲処において甚深なる見解の導きを修習したので“如実に相続において誕生なされた断捨者”として有名である<sup>27</sup>。(19)gZhon dkon pa, (24)Sangs tshul ba と、(21)rGyal mchog pa の3者は、順次に、ポト寺<sup>28</sup>、ドンテン寺<sup>29</sup>、ブンカル寺<sup>30</sup>を執りしきり利他を行われた。この最後の者に

---

<sup>27</sup> テキスト “ji lta ba bzhin rgyud la 'khrungs ba'i (C pa'i) spong ba par grags” は、「師ギエンサンワの教えを如実に相続した断捨者」くらいの意味か。

<sup>28</sup> 『ゲルク派史』(pp.175,22-176,4)に“ポト寺 (Pu to dgon)”の解説があるが、そこに gZhon dkon pa の名は出ていない。なお『ゲルク派史』洋装出版本では“pu to”と綴るが、この寺はカダム派のポトワ (Po to ba Rin chen gsal, 1027-1105) がペンユル・ニエンポ ('Phan yul Nyan po) に建立した寺で、ポト寺 (Po to dgon pa) を建立したことから、彼は“Po to ba”と言われるようになったという。 Cf.羽田野[1954:104;123,n.4]; 後注 51. ほかに、Roerich[1949:268]; Ferrari [1958:83,n.26]; Bod yig tshig gter, p.1907 参照。

<sup>29</sup> 『新旧カダム派史』テキスト(M/C)に“'Brom stengs”とあるが、それはセラ寺の学堂の一つ。ここは『ゲルク派史』に“'Brong steng bla ma”とあるように、ペンユルにある寺“'Brong steng”に訂正した。Ferrari[1958:100,n.81]は『パクサムジョンサン史』(dPag bsam ljon bzang, p.307,3)に依ってセラ寺の学堂の一つとして“'Brong steng”をあげるが、'Brom stengs と 'Brong steng は区別されるべきだろう。ペンユルのドンテン寺 ('Brong steng) の解説が『ゲルク派史』(p.175,13-21)にある。しかしそこに Sangs tshul ba/Sangs rgyas tshul khirms の名は出ていない。その代わりに、同寺の住持として、(22)Kre ring(s) pa Blo gros rin chen pa と、(9)'Jam 'phags pa があげられている。

<sup>30</sup> ブンカル寺 (dPung mkhar) は不明。Dung dkar tshig mdzod にあげる論師名として“Kong po sPungs mkhar dgon gyi bla ma”とあるから、コンポ地方の寺であろう。

Bla ma rGya brag pa が具足戒の戒師をお願いしたというのが有名である。(18) Grags 'od pa はリカ寺を執りしきり衆を護持し<sup>31</sup>, (25) Byi'u gnas brtan は rGya la shod にペンカル寺を建立されたようである<sup>32</sup>.

1.2 『新旧カダム派史』にみられる「ギェンサンワ略伝」は、以上である。略伝中、最後の〔弟子〕に列挙されている人物について簡単にコメントするなら、まず(2) Chos rje dPal seng ba (dPal ldan seng ge) と、(3) Chos rje Rin byang pa (Rin chen byang chub) の2人は、サンブ上院長(第25代/第27代)<sup>33</sup>、及びデプン寺座主(第2代/第3代)をつとめた大物で、ギェンサンワのサンブ時代の弟子であろう<sup>34</sup>。

(6) Chen po Byang 'bum pa (Byang chub 'bum) は、セラ・メパ学堂 (Se ra smad pa) の創設者で、その後のメパ学堂長は、(8) Chen po g.Yu ba (g.Yu pa brTson 'grus bzang po), (13) Za ru Shāk bkras (Slob dpon Shākya bkra shis pa) と次第する。

(7) Sher rgyam pa (Chen po Shes rab rgya mtsho) は、『新旧カダム派史』『ゲルク派史』によると、セラ・トゥパ学堂 (stod pa) の創設者で<sup>35</sup>、その後のトゥパ学堂長は、(11) Chos blo ba (Gung ru Chos blo), (15) Shāk bzang pa (Slob dpon Shākya bzang po), (22) Slob dpon Kre rings (Kre ring(s) Blo gros rin chen), (9) 'Jam 'phags pa ('Jam dbyangs 'phags pa) と次第する<sup>36</sup>。この最後の人物は、『ゲルク派史』によると、セ

<sup>31</sup> この人物の名として、『新旧カダム派史』“Grags 'od pa (=Grags pa 'od zer)”と『ゲルク派史』“Groggs 'ong ba”という、チベット文字では綴りの似ている2つがある。現代の辞典類でもどちらかを採っている。又、*Dung dkar tshig mdzod*, p.1896によると、リカ寺 (Ri kha), 詳しくは Ri kha dga' ldan bshad sgrub dar rgyas gling は、もとはポトワの直弟子 Ri mkhar ba が建立した、コンポ・ニンティ (Kong po Nying khri) にあるカダム派の古刹。Cf. *Bod yig tshig gter*, pp.3173-74.

<sup>32</sup> 『ゲルク派史』(p.334,17-22)に、mDo khams stod における諸寺の解説のなかでペンカル寺 (Ban mkhar) を扱っている。そこにこうある: rGya shod Ban mkhar ni/ mTshungs med chos rje'i slob ma Bye'u gnas brtan Blo bzang nyi mas btan/ ほかに、*Bod yig tshig gter*, p.2141によると、同寺は1488年建立、現在のチベット自治区 Nag chu sa khul 'Bri ru rdzong khongs にあるという。

<sup>33</sup> Cf. Onoda [1989:212].

<sup>34</sup> 両者の略伝は、『新旧カダム派史』『ゲルク派史』にみられる。特に Rin chen byang chub がサンブにおいてギェンサンワの教えを受けたことは、『新旧カダム派史』(M93a1(p.193), C116, 13-14), 『ゲルク派史』(p.106,16-17)に出ている。

<sup>35</sup> セラ・トゥパ学堂の創設者については異説がある。*Grwa sa chags tshul*, p.54,19-20によると、ギェンサンワ自身 (mTshungs med chos rje nyid) の創設だが、西沢 [2011:549,n.2292] にしたがって、『新旧カダム派史』にあるより古い伝承を採っておく。

<sup>36</sup> 『新旧カダム派史』トゥパ学堂長の系譜にあげられる “Chen po 'Jam 'phags pa” 下線部は、

ラ・ギャ学堂 (rgya) の創設者 (Chos rje rab 'byams pa Chen po 'Jam 'phags pa) でもあるだろう。

ほかに、略伝本文の繰り返しになるが、(18)mKhan po Grags 'od pa (Ri kha bla ma Grog 'ong ba) はリカ寺の住持、(19)gZhon dkon pa (Pu to bla ma gZhon nu dkon mchog) はポト寺の、(21)rGyal mchog pa (dPung mkhar bla ma rGyal mchog pa) はペンカル寺の、そして(24)Bla ma Sangs rgyas tshul khrim ( 'Brong steng bla ma Sangs rgyas tshul khrim) はドンテン寺の住持をつとめた。最後の(25)Byi'u gnas brtan pa (Bye'u gnas brtan Blo bzang nyi ma) は、ペンカル寺を建立した。

上の弟子リストにあげられている25人のうち経歴の不明な人物もいるが、リストからはギェンサンワの影響力が知られて興味深い。はじめの(2)(3)の大物2人はギェンサンワのサンブ時代の弟子で、その両人をのぞくと、リストにおいて特に目につくのは、やはりセラ寺関係の人物が多い点である。次節でみるように、いつの頃からかセラ寺においてギェンサンワの著作は学習されなくなるが、弟子リストをみるなら、彼の没後、しばらくの間は彼の直弟子たちがセラ寺で活躍しその学問を継承していたものと思われる。

## 2 ギェンサンワの著作

『著作集』3巻にはギェンサンワの作品7編が収録されている。その出版にいたった経緯が『著作集』編集解説 (bsdu sgrig gsal bshad, pp.1-2) に記されているので、以下に和訳を示す。

時の移り変わりと人の種々なる因縁に依り、チベットに順次に現れなされた学者・成就者たちが苦勞するのも顧みずに成就したところの、知性の精華のごとき実に多くの著作全集の書物の相続が断たれようとしている。特にクンル・ギェルツェンサンポのご著作は、その当時の趨勢として、彼の見解のあり方が尊者ツォンカパ・チェンポと少しばかり一致しないという如き注目と評判に依

---

『ゲルク派史』洋装出版本 (p.141,1) に“grags”とあるが誤植とみて“phags”を採る。

って盛行したという単にそれだけのことであったようには思えない（つまりツォンカパ説との不一致によるばかりでなく所説内容そのものの卓越性により彼の著作が盛行した面もあったであろう）。それでも、後にクンルの著作集全体を版木に刻んで〔それが〕セラ・メ学堂の専門の教科書となり〔彼の著作が〕釈説・聴聞により流布したことも少しばかりあったが、しかしながら、以前の（ギェンサンワの）中観の見解に関わる論点をめぐって、各地の学者たちが、クンルの教科書がこのように大変流行したときに「ツォンカパ尊者のお認めになる学説に不純物が入っている」と疑念を抱いた等の批判されるべき問題が続々と起こった。それら等に依り、その同じ立派なお方（ギェンサンワ）のご著作を教科書の中心として採用するセラ・メ学堂においてさえも、以前に存在した教科書から、後にケードゥプ・テンタルワの教科書に変えられて、順次に、この同じ立派なお方のご著作についての釈説・聴聞を、至る所で、行なう人がいなくなったのに加えて、以前に存在した諸の版木さえも火神の御口のなかに（つまりストーブのなかに）投げ入れてしまった有り様などは、そのお方のご著作のお仕事が太陽にとっての障害物である雲の間に沈んでしまった〔如くである〕。これ等よりのち今や書物の相続がきわめて稀であるのに加えて、作品断片が一つ二つあるにしてもアムド、ウ、カムの3地方に散らばって存在し、そして幾つかは外国の図書館の一つ二つに存在するのを聞いているほかには、全ての揃った原本は今もって探し求めることができない。

今回ここに出版したその立派なお方の著作集は、①『般若現観莊嚴論の注釈・弥勒の密意の莊嚴』と、②『中観四百論の注釈』、③『般若・学者を魅了する』、④『入中論の解説・縁起の真相を明かす』、⑤『根本中論の注釈』、⑥『千葉・略本』、⑦『善説ラマの口訣・甘露の流れ』という、『千葉・中本』を含む作品7編が現存するが、そのうちこの第2巻では『中観四百論〔の注釈〕』等の6編を1巻にして出版した<sup>37</sup>。

---

<sup>37</sup> 第2段落の原文は次の通り：da lan 'dir par bskrun zhus pa'i dam pa gang gi gsung 'bum gras ①

上の「編集解説」は何らかの伝承に基づいているのだろうが、その根拠は不明である。ともあれ上の解説によると、ギェンサンワの著作は一時期流行し、著作集が版木に彫られてセラ・メ学堂の教科書として使用されたが、その後、ツォンカバ説と一致しないことから批判を受け、セラ・メ学堂の教科書もテンタルワ (mKhas grub dGe 'dun bsTan pa dar rgyas, 1493-1568) のものに変えられて、ギェンサンワの著作は顧みられなくなり、終にはその版木が燃やされもしたという。よって、現在ではその著作の蒐集は困難なことであったが、どこでも原本を探し求める努力を重ねた結果、7編を出版することができたとする。『布達拉宮典籍目録』(gSung 'bum dkar chag) にギェンサンワの現存作品5編がそのペチャ枚数とともに記されており<sup>38</sup>、『著作集』収録作品にもその底本のペチャ枚数が挿入されているが、その双方の枚数がほぼ一致することから、出版された7編のうち①④⑤⑥の4編は『目録』記載のペチャに基づくのだろう。

その現存作品及び未入手作品を網羅した著作リストは『著作集』所収略伝にみられる。それは、アクリンポチェ (A khu rin po che Shes rab rgya mtsho, 1803-1875) の『稀書リスト (dPe dkon tho yig)』に多くを依存しているように見える。『稀書リスト』に見出されるものはその番号 (AR と略) を、そして『著作集』3巻収録の作品はその巻数 Vol.とページ (太字で記す) を併せて記すと、『著作集』所収略伝中

---

*Sher phyin mngon rtogs rgyan gyi 'grel pa Byams pa'i dgongs rgyan dang/ ② dBu ma bzhi brgya pa'i 'grel pa/ ③ Sher phyin mKhas pa'i yid 'phrog ④ dBu ma 'jug pa'i rnam bshad rTen 'byung gi de nyid gsal byed/ ⑤ rTsa ba shes rab kyi 'grel pa/ ⑥ sTong thun bsdu pa/ ⑦ Legs (bla) bshad bla ma'i man ngag bDud rtsi'i chu rgyun ces pa sTong thun 'bring po* bcas chos tshan khag bdun yod pa rnams las/ deb gnyis pa 'dir dBu ma bzhi brgya pa sogs tshan pa drug deb gcig tu btang nas par bskrun byas pa yin/ この文にはいくつか理解しにくい箇所がある。現存作品7編のうち下線部 “⑥ sTong thun bsdu pa (千葉・略本)” と “sTong thun 'bring po (千葉・中本)” が分かりにくい。それは以下の「著作リスト」において検討することにして、ここで最後の破線部についてのみコメントするならば、破線部よると、「現存7編のうち①『般若現觀莊嚴論の注釈』は大著(出版本で654頁)であるためその1作品を第1巻に収め、残余の『四百論の注釈』等の6編②～⑦を第2巻にまとめて収録して出版した」という意味になるだろうか。しかし実際には『四百論注』等の6編は『著作集』第2と第3の2巻に収録されていて、出版された『著作集』は計3巻である。

<sup>38</sup> gSung 'bum dkar chag, p.150 : 「dBu ma rtsa ba shes rab kyi don bsdu/ 43 枚」 「stong thun/ 53 枚」 「dBu ma la 'jug pa'i 'grel pa rGyal mtshan dpal bzang gis mdzad pa/ 38 枚」 「Byams pa'i dgongs rgyan/ 188 枚」 「Theg pa chen po rgyud bla ma'i 'grel pa/ 53 枚」。

の著作リストは以下のとおりである<sup>39</sup>。

- (1.1)(1.2)(1.3) 広・中・略の3つの『千葉』 *sTong (m)thun rgyas 'bring bsduṣ gsum*.  
Cf. AR11392: *dBu ma'i stong thun*; **Vol.3, pp.177-350**: *dBu ma'i stong thun*; **Vol.2, pp.284-421**: *Legs bshad bla ma'i man ngag bDud rtsi'i chu rgyun*.
- (2) 『中観の見解の導き』 *dBu ma'i lta khrid*; AR11295: *rGyal mtshan bzang po'i lta khrid (?)*
- (3) 『無我の意味の修習の仕方の次第』 *bDag med pa'i don sgom tshul gyi rim pa* ;  
AR11394: *bDag med pa'i don sgom tshul gyi rim pa dogs gcod dang bcas pa*.
- (4) 『中観概論・賢者の悦びを生ずる』 *dBu ma'i spyi don Blo bzang dga' bskyed* ;  
AR11389: *Gung ru rGyan bzang pa'i dBu ma'i spyi don Blo gsal dga' byed* (AR  
11389~95 をゲンサンワ作とする).
- (5) 『根本中論の注』 *rTsa ba shes rab kyi 'grel ba* ; AR11390: *rTsa she'i tikka* ; **Vol.2, pp.1-154** : *dBu ma rtsa ba shes rab kyi don bsduṣ*.
- (6) 『六十頌如理論の注』 *Rigs pa drug cu pa'i 'grel ba* ; AR11395: *Rigs pa drug cu pa'i tikka*.
- (7) 『廻諍論の注』 *rTsod bzlog gi 'grel ba* ; AR11393: *rTsod zlog gi tikka Legs bshad snang ba*.
- (8) 『四百論の注』 *bZhi brgya ba'i 'grel ba* ; **Vol.3, pp.1-176** : *dBu ma bzhi brgya pa'i 'grel pa*.
- (9) 『中観莊嚴論の注』 *dBu ma rgyan gyi 'grel ba*.
- (10) 『入中論の注・縁起の真相を明かす』 *dBu ma 'jug pa'i rnam bshad rTen byung gi de nyid gsal byed* ; AR11391: *'Jug pa'i rnam bshad rTen 'byung gi de nyid gsal byed* ; **Vol.2, pp.155-283** : *dBu ma la 'jug pa'i 'grel pa*.
- (11) 『般若心経の注』 *Shes rab snying po'i 'grel ba* ; AR11314: *Gung ru rGyan bzang sogs kyi Sher snying tikka yang mang*.

---

<sup>39</sup> 西沢[2011:554-556]に、ゲンサンワの著作が整理されている。

- (12) 『(ツォンカパ作) 縁起讚の注』 *rTen 'brel bstod pa'i 'grel ba* ; AR 11265 :  
*rTen 'brel bstod pa'i ṭikka*……Gung ru rGyan bzang ba……rnams kyis mdzad pa.  
 Cf.東北 No.5275(15), 大谷 No.6016.
- (13) 『(ツォンカパ作) 自伝ドゥンレクマの注』 *rTogs brjod mdun legs ma'i 'grel ba* ;  
 AR10856 : Gung ru rGyal mtshan bzang po'i *rTogs brjod 'dun legs ma'i ṭikka*<sup>40</sup>.  
 Cf.東北 No.5275(58), 大谷 No.6060.
- (14) 『現観莊嚴論注・学者を魅了する』 *mNgon rtogs rgyan gyi 'grel ba mKhas pa'i*  
*yid 'phrog* ; Vol.3, pp.351-414 : *mNgon par rtogs pa'i rgyan gyi de kho na nyid gsal*  
*bar byed pa mKhas pa'i yid 'phrog*.
- (15) 『般若・弥勒の密意の莊嚴』 *Phar phyin Byams pa'i dgongs rgyan* ; AR11615 :  
 Gung ru rGyan bzang pa'i *Phar phyin Byams pa'i dgongs rgyan* (AR11615~16 を  
 ギェンサンワ作とする) ; Vol.1, pp.1-654 : *Byams pa'i dgongs rgyan*.
- (16) 『莊嚴經論の注』 *mDo sde rgyan gyi 'grel ba* ; AR11616 : *Byams chos phyi ma*  
*bzhi'i ṭikka*<sup>41</sup>.
- (17) 『中辺分別論の注』 *dBus mtha' rnam 'byed kyi 'grel ba* ; AR11616.
- (18) 『法法性分別論の注』 *Chos nyid rnam 'byed kyi 'grel ba* ; AR11616.
- (19) 『俱舍論の注』 *mNgon pa mdzod kyi 'grel ba* ; AR 11690 : Gung ru rGyal mtshan  
 bzang po'i *mDzod 'grel*.
- (20) 『律概論』 *'Dul ba'i spyi don* ; AR11773 : Gung ru rGyan bzang pa'i *'Dul ba*.
- (21) 『プラマーナ論書・学者の悦びを生ずる』 *Tshad ma'i bstan bcos mKhas pa dga'*  
*bskyed* ; AR11866 : Gung ru rGyan bzang ba'i *Tshad ma'i bstan bcos mKhas pa*  
*dga' byed*.

上のリストに密教の著作はみられない。ギェンサンワは主に顕教の分野で活躍し

<sup>40</sup> Cf. *Klong gSung 'bum dkar chag*, C602,9-10, D(Ra)47a4(p.1377) : da pa la rJe'i rnam thar Gung ru rGyal mtshan bzang pos (⇒D po'i) *mDun legs ma'i 'grel pa la zhe bdun*/

<sup>41</sup> *bKa' gdams chos 'byung*, 378a3-4 に, 「*mDo sde rgyan la sogs pa'i Byams chos phyi ma rnams*」への注釈があげられている。

たのだろう。その学問は、中観・般若・唯心・アビダルマ・律・プラマーナに及び幅広いが、前節で和訳した略伝に「特に中観テキストの説明を正しく行われた」とある通り、中観関係の著作がやはり多い。ほかに、ギェンサンワは師ツォンカパ説に対して異説を唱えた論師として知られるが、著作リストにツォンカパの2作品への注釈がみられるのが注意を惹く。

上の著作リストにも、しかし問題がある。重要な点をいくつか検討しておく。

まず、著作リスト(1.1)(1.2)(1.3)にあるような、ギェンサンワが“stong thun (千葉)”という語を書名にもつ作品を広・中・略の3部著したとする資料は、他に筆者は確認できていない。『著作集』所収の編集解説及び略伝の記述は独特である。上に訳出した編集解説に、『著作集』収録作品について、

- ①『般若現観莊嚴論の注釈・弥勒の密意の莊嚴』と、②『中観四百論の注釈』……⑥『千葉・略本 (*sTong thun bsdus pa*)』, ⑦『善説ラマの口訣・甘露の流れ』という、『千葉・中本』を含む作品7編が現存する……

とあるが、この一節から判断すると、まず『著作集』編集者が『著作集』Vol.3 (pp.177-350) 収録の『中観千葉 (*dBu ma'i stong thun*)』を(1.3) “*sTong thun bsdus pa* (千葉・略本)”とみているのは間違いない<sup>42</sup>。又、『千葉・中本』を含む作品7編が現存する (*sTong thun 'bring po bcas chos tshan khag bdun yod pa rnam*) という記述から、『著作集』編集者の理解において “bring po(中本)” も現存していることになる。そのことは、上には訳出しなかったが『著作集』編集解説 (p.3) に、「(1.1) “*sTong thun rgyas pa* (千葉・広本)” は原本を入手できなかった」と、特に記されていることから窺い知れる。それは「広本以外の略本と中本は入手できた」を含意するだろう。そしてその “bring po(中本)” を現存7編に求めるなら、『善説ラマの口訣 (*Legs bshad bla ma'i man ngag*)』は『著作集』Vol.2 (pp.284-421) に収録出版されているにもかかわらず上の著作リスト(2)~(21)に挙げられていないが、それは、『著作集』編集者が同書を(1.2) “*sTong thun 'bring po*” とみていたからかと思われる。同書は、初

<sup>42</sup> “*dBu ma'i stong thun*” の呼称には、“*sTong thun bsdus pa*” に類似したソナムタクパの用いる “*sTong thun chung ba*” があるが、これについては、後注46参照。

めに異教徒と毘婆沙師・経量部・唯心派の教義を簡単に解説した後の中観説における難解な諸問題を詳論する作品で、その構成・内容は『中観千菓』に類似しており、『中観千菓』が“stong thun”であるなら『善説ラマの口訣』も同じように“stong thun”と呼ばれても不合理ではないとも言える<sup>43</sup>。ただし出版本では、『中観千菓』は174頁、『善説ラマの口訣』は138頁であるから、この点で前者が“略本”そして後者が“中本”であるのは理に合わないようにも思える。

以上、著作リスト(1.1)(1.2)(1.3) “sTong (m)thun rgyas 'bring bsodus gsum”について検討したが、資料が限られていて、不明な点が多い。確かなのは、“stong thun”という語を書名に含むギェンサンワの作品として“dBu ma'i stong thun (中観千菓)”が出版されたということだけである。尤も、その書名にも若干の問題がある。出版されたテキスト(『著作集』Vol.3, p.177)には、著作本文に先行して、「Gung ru rGyal mtshan bzang po'i gsung dBu ma'i stong thun bzhugs so//」とあるが、これはおそらく底本ペチャ冒頭(1枚目の表)にある表題をそのまま再現したもので、そうであれば問題の作品は確かに“dBu ma'i stong thun”というタイトルで伝えられてきたのだろう。しかし、その著作本文そして奥書には“dBu ma'i stong thun”という書名も“stong thun”という語もみられず、ギェンサンワ自身に由来する本来の書名は不明と言わざるを得ない<sup>44</sup>。この点に関して“dbu ma'i stong thun”という語は、古く『カダム派明灯史』(1494年作)にみられるが、そこではそれは書名というより、論書の性格を言い表した便宜的な呼称で、「中観説についての stong thun」くらいの意味のようにみえる<sup>45</sup>。『明灯史』に時代の近いソナムタクパは、前節で和訳し

<sup>43</sup> “stong thun”の語義については、ツルティム/藤仲[2001:41]、前注18を参照。

<sup>44</sup> 出版テキスト奥書に、「濁世における第二の勝者で一切智者なるロサンタクパ御前(ツォンカパ)の開拓した勝れた善き道が、[人々を]正理の要点の細妙なる道より導いて、他の極端に流転する余地を否定した後に、再び善き道を開拓した、この[著作]は〜(BMTT, p.350,3-6 : ces snyigs dus kyi rgyal ba gnyis pa thams cad mkhyen pa Blo bzang grags pa'i zhal snga nas kyi srol phyed ba'i lam bzang dam pa ni/ rigs pa'i gnas phra mo'i lam nas drangs te/ mtha' gzhan du srid pa'i gnas bkag nas slar yang lam bzang po'i srol phyed ba' di ni/)とあるが、これは、「ツォンカパが流儀を開いた後、再び私ギェンサンワが流儀を開いた」という著作の次第もしくは趣旨を述べたもので、いわゆる書名ではないだろう。

<sup>45</sup> bKa' gdams chos 'byung, 378a4 : 'Jug pa dbu ma rig tshogs rnam kyi fikka dang/ dbu ma'i stong thun khrid yig sogs te rtsom pa'ang mang du mdzad nas bstan pa la phan cher btags so// 下線部は、

た『新旧カダム派史』(1529年作)所収略伝においてギェンサンワの問題の著作を単に“*sTong thun*”という名で呼び、そして中観論書でも“*sTong thun chung ba*”という呼称を用いるにすぎない<sup>46</sup>。そのソナムタクパの用法に倣ったものと思われるが、ジャムヤンシェパ(’Jam dbyangs bzhad pa’i rdo re, 1648-1722)も『中観考究(’Jam dBu mtha’ dpyod)』においてギェンサンワ説を、“*sTong thun chung ba*”の所説、“*sTong thun chung ba pa*(千葉小論の作者)”の所説として引用することがある<sup>47</sup>。こうしてみると、ギェンサンワの問題の作品は、古くは、いわば通称により単に“*stong thun*”と呼ばれていた可能性があるだろう。その後、18世紀後半、チャンキャ(’lCang skya Rol pa’i rdo rje, 1717-1786)や、クンチョク・ジクメワンポ(dKon mchog ’Jigs med dbang po, 1728-1791)は宗義書において、“*dbu ma’i stong thun*”を、ともかくギェンサンワの作品の書名として用いており<sup>48</sup>、さらにその後、アクリンポチュエ(1804-1875)は『稀書リスト』(AR11392)に「ギェンサンワ作 *dBu ma’i stong thun*」を記載した。その書名の源は『明灯史』の記載“*dbu ma’i stong thun*”にまで遡るのかもしれないが、それが書名“*dBu ma’i stong thun*”として定着したのは、さほど古い時代においてではなかった可能性があるだろう。今日われわれが一般に用いる書名にはこのように明確でない点はあるが、しかし所謂『中観千葉』は、そ

---

「中観の *stong thun* と、中観の *khrid yig*」の意味で、ここに“*dBu ma’i stong thun*”という書名が示されているのではないと思われる。

<sup>46</sup> ソナムタクパがギェンサンワの問題の論書を“*sTong thun chung ba*(千葉小論)”という名で言及するとき、単なる“*stong thun*”が書名にあたり、そして“*chung ba*(小論)”は、ケードゥプの所謂“*sTong thun chen mo*(千葉大論)”との対比において便宜的に「小論」と呼んだとみることができる。その“*chung ba*”は無論、「著作リスト」にある広・中・略(rgyas ’bring bsdus)のなかの“略本(bsdus pa)”の意味ではない。Cf.小林[2014].

<sup>47</sup> ただし、ジャムヤンシェパの全著作における“*dBu ma’i stong thun*”という書名の有無は、今のところ不明。Cf.後注49.

<sup>48</sup> ’lCang skya grub mtha’, C83,15, P(Ka)88b2 ; dKon mchog grub mtha’, p.90,1-2. なお、クンチョク・ジクメワンポの宗義書(p.90,2-14)には、唯心形象真実派の下位区分である多様不二等の3派に関するギェンサンワ作『中観千葉(*dBu ma’i stong (m)thun*)』の所説が引用されているが、それは実はセラ・ジェツンパの宗義書(’rJe btsun grub mtha’, M28,16-29,13, S7b4-8a1)における形象真実3派の説明をそっくり引用したものである。ジクメワンポはギェンサンワ作『中観千葉』そのものを見ることなく、セラ・ジェツンパの宗義書の所説をギェンサンワ説として引用したに違いない。セラ・ジェツンパの説明は“斑の認識”の比喻によって多様不二等を説明する点でギェンサンワ説を承けているに違いないが、しかし彼の特に一卵半塊と多様不二の説明の仕方は実際のギェンサンワ説と大きく異なっており、ジクメワンポの宗義書の記述の扱いには注意が必要である。Cf.後注49.

の所説がケードゥプそしてその後の諸論師によって言及される点で<sup>49</sup>、ギェンサンワの代表作とあってよい。それが現存し出版された意義は大きいだろう。

次に、著作リスト(14)『現観莊嚴論注・学者を魅了する』は現存していて、『著作集』Vol.3(pp.351-414)に収録されている。これは、著作リスト(15)『般若・弥勒の密意の莊嚴』(『著作集』Vol.1, pp.1-654)に比べるとだいぶ小さな作品で、(15)は般若注広本、(14)は略本となろうか<sup>50</sup>。しかし実はこの作品の著者名は奥書に「dge

---

<sup>49</sup> 例えばジャムヤンシェバは『大宗義書』経量部章 (*Grub mtha' chen mo*, K152b6-153a6(pp.336-337), C299,12-300,11)において、経量部・唯心形象真実派共通の下位区分とされる多様不二・主客同数・一卵半塊の3派の語義を“斑の認識”の比喩を用いて説明するギェンサンワ説を引用するが、それは『中観千葉』(BMTT, pp.190,1-191,5)にそのまま見出すことができる。

ジャムヤンシェバがより多くギェンサンワ説を引用論評するのは、『大宗義書』ではなく『中観考究』においてである。彼は『中観考究』においてたびたびギェンサンワの名をあげてその所説に言及する。それらの言及は、1つを除くと、所謂“中観派の帰謬の反転 (*dbu ma thal bzlog*)”と、帰謬派のプラマーナ論に関わるもので、それらのギェンサンワ説は既にケードゥプ以来の諸論師が取り上げており、ほぼ『中観千葉』に見出すことができる。Cf.小林[2014]。残余のギェンサンワ説は、こうである—「[ツォンカパの]『善説心髓』に「外界の非存在」は、パーヴィヴェーカ(清弁)によって如何なる經典の密意であるとも認められていない」と説明されているのに対して、法主ギェンサンワは、「それは正しくないという不合理なことになる。なぜなら[清弁は]“アーラヤ識の存在”を説く經典を承認するから。そういうことになる。なぜなら、彼は、アーラヤ識を説く『入楞伽經』等の經典を見ているから」という」(*Jam dBu mtha' dpyod*, 407a2-5(p.815) : *Legs bshad snying por phyi rol med pa Legs ldan gyis mdo gang gi yang dgongs par mi 'dod par bshad pa la Chos rje rGyan bzang ba na re/ de mi 'thad par thal/ kun gzhi yod par ston pa'i mdo khas len pa'i phyir/ der thal/ des kun gzhi ston pa'i Lang gshegs sogs kyi mdo de mthong ba'i phyir na*)。これは、ツォンカパ説に反して、清弁は“アーラヤ識の存在”を説く經典を承認するから“外界の非存在”を必ずしも否定しないというもので、このギェンサンワに帰せられる説だけは『中観千葉』にみられない。同問題に関連して、同書にはむしろ、こうある—「清弁とジュニャーナガルバ及びその随順者たちは、“一向にアーラヤ識は存在する”ということ否定なさっているから、アーラヤ識をお認めにならないように思える」(BMTT, p.209,11-13 : *Legs ldan 'byed/ Ye shes snying po rjes 'brang dang bcas pa rnams kyiis mtha' cig tu kun gzhi yod pa la dgag pa mdzad pas/ kun gzhi mi bzhed par snang la/*)。ジャムヤンシェバ所引の上のギェンサンワ説は、彼の別書に説かれているのだろうか。

ほかに、前述のようにジャムヤンシェバは『中観考究』において、2つのギェンサンワ説を、“*sTong thun chung ba (pa)*”の所説として引用する。1つは、『撰大乘論』等に説かれる同一事物に対する餓鬼・神・人などの認識の相違をめぐる問題で、ジャムヤンシェバの引用 (*Jam dBu mtha' dpyod*, 320a4ff.(p.641ff.))は、リテラルには一致しながら、『中観千葉』(BMTT, pp.321,3-325,2)に、ほぼ見出すことができる。もう1つの引用は、「千葉小論の作者は、こう言う—輪廻の根本である無明には2つある。業果に関して蒙昧な[無明]と、真実に関して蒙昧な[無明]の2つである」(*Jam dBu mtha' dpyod*, 411b6(p.824) : *sTong thun chung ba pa na re/ 'khor ba'i rtsa bar gyur pa'i ma rig pa la gnyis yod de/ las 'bras la rmongs pa dang/ de kho na nyid la rmongs pa gnyis zer zhing/*)というもので、これは『中観千葉』(BMTT, p.213,7-9)にそのまま見出すことができる。

<sup>50</sup> もっとも、出版テキスト奥書にある(14)の具名“*Shes rab kyi pha rol du phyin pa'i don bsdus pa mNgon par rtogs pa'i rgyan gyi de kho na nyid gsal bar byed pa mKhas pa'i yid 'phrog ces bya ba*”のうち下線部“*bsdus pa*”が「略本」を意味するわけではない。それは「般若經の意味を要

slong 'khar thog pa rGyal mtshan bzang po がツェタン寺で著した」とある。このことから、西沢[2011:556,n.2318]は、下線部“'khar thog pa”が「カルトク（という出身地）の人」の意味であるなら、ギェンサンワと出身地が一致せず、(14)は同じ“rGyal mtshan bzang po”という名の別人の作である可能性を示す<sup>51</sup>。今後の課題だろう。

最後に、著作リスト(15)～(18)に、いわゆる弥勒五法への注釈書が並んでいる。そのうち(16)(17)(18)の3書は、アクリンポチェ『稀書リスト』(AR 11616 : Byams chos phyi ma bzhi'i ṭikka) に依っていると思われるが、不思議なことに『究竟論 (Uttaratantra)』への注釈があげられていない。『布達拉宮典籍目録』(gSung 'bum dkar chag) に記されているギェンサンワの現存作品5編のうち第5は「*Theg pa chen po rgyud bla ma'i 'grel pa* 53 枚」である<sup>52</sup>。ペチャに記された著者名を確認する必要はあるが、著作リストに『莊嚴經論注』等をあげるのなら、とりあえず上の『目録』の記載にしたがって『究竟論注』も加えておいてよいだろう。

## おわりに

第1節で訳出した『新旧カダム派史』所収の略伝によると、ギェンサンワは学者として大成してからセラ寺の座主をつとめ、多くの著作も著わし弟子にも恵まれた点で、学問僧として充実した人生を全うしたと言える。彼の生涯において特記すべきは、師ツォンカパ説と一致しない見解を提示した点で、これが、同時代人のケードゥブとの（少なくとも書物のなかでの）不和対立、その後の諸論師による批判を招

---

約した(bsdus pa) 現観莊嚴論の～」の意味であろう。なお、アクリンポチェのリストに、AR 11584 : Gung ru'i Phar phyin bsdus paとあるが、この「Gung ru」は、その直前のAR 11577にあげられているsGo mang Gung ru Chos 'byung (Chos kyi 'byung gnas)のことで、ギェンサンワではないだろう。

<sup>51</sup> 『カダム派明灯史』(219b5-6)によると、カダム派のポトワはポト寺建立以前に mKhar thog にいらっしやった時には“dGe bshes mKhar thog pa”と言われていたという。Cf.羽田野[1954:123,n.4];前注28。これを参考にすると作品(14)の奥書の“'khar thog pa”は“mkhar thog pa”に訂正の可能性もあろうか。その mKhar thog は、15世紀後半にパクモドゥ派とリンブンパの係争地にもなったヤルルンの mKhar thog か。Cf. Tucci[1949:29;642];佐藤[1986:366;373]。ヤルルンの mKhar thog であるなら、ギェンサンワはその出身でもなく、そこに滞在したことも今のところ知られていない。

<sup>52</sup> Cf.前注38。

くことになった。

第2節で検討した『著作集』編集解説及び著作リストによると、ギェンサンワは主に顕教の分野で活躍した論師で、著作活動では特に中観に関して多くの作品を著わした。しかし、彼の没後、その著作はいつの頃からか学習されることがなくなり著作は散逸してしまった。現在彼の全集 (gsung 'bum) は得られず入手可能な著作は多くはないが、所謂『中観千葉』が現存し出版されたのは幸いであった。後代の諸論師が引用論評するギェンサンワ説は主に同書にみられるもので、そうした他の論師による言及と同書を併せて検討することにより、主にゲルク派中観思想の展開の一端を明らかにすることができるだろう。今後の研究が期待される。

#### 略号及び使用テキスト

*Klong sKyes bu mtshan tho*      *Klong rdol bla ma Ngag dbang blo bzang : rGya bod du byon pa'i bstan 'dzin gyi skeyes bu dam pa rnams kyi mtshan tho.*

C : *Klong rdol Ngag dbang blo bzang gi gsung 'bum*, 西藏藏文古籍出版社 (Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang), 1991, Vol.2, pp.353-418.

D : *The Collected Works of Longdol Lama*, Parts 1,2, reproduced by Lokesh Chandra, New Delhi, 1973, pp.1150-1214. Cf.東北 No.6552.

*Klong gSung 'bum dkar chag*      *Klong rdol bla ma : bKa' gdams pa dang dGe lugs pa'i bla ma rags rim gyi gsung 'bum dkar chag.*

C : *Klong rdol Ngag dbang blo bzang gi gsung 'bum*, Vol.2, pp.495-638.

D : *The Collected Works of Longdol Lama*, pp.1285-1413. Cf.東北 No.6555.

*dKon mchog grub mtha'*      *dKon mchog 'Jigs med dbang po : Grub pa'i mtha'i rnam par bzhag pa Rin po che'i phreng ba.* ed. by K.Mimaki: "Le Grub mtha' rnam bzag rin chen phreñ ba de dKon mchog 'jigs med dbañ po (1728-1791)," *ZINBUN* 14, 1977, pp.55-112.

*bKa' gdams chos 'byung*      *Las chen Kun dga' rgyal mtshan : bKa' gdams chos 'byung gSal ba'i sgron me.* TBRC, W23748. Cf.東北 No.7038.

*bKa' gdams gsar rnying*      *Pañ chen bSod nams grags pa : bKa' gdams gsar rnying gi chos 'byung Yid kyi mdzes rgyan.*

C : 『新旧噶当史籍』 *Gangs can rig mdzod* 36, 西藏藏文古籍出版社, 2001.

M : *The Collected Works (gSun 'bum) of Pañ-chen bSod-nams-grags-pa, Reproduced from Prints and Manuscripts from Various Collections*, pub. by

- Drepung Loseling Library Society, Vol.11, Mundgod, fols.1-162a(pp.9-331).  
*Gangs can ming mdzod*      *Gangs can mkhas grub rim byon ming mdzod* (雪域歷代名人辭典), 甘肅民族出版社 (Kan su'u mi rigs dpe skrun khang), 1992.
- Grub mtha' chen mo*      'Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje : (rtsa ba) *Grub mtha'i rnam par bzhag pa 'khrul spong gdong lnga'i sgra dbyangs kun mkhyen lam bzang gsal ba'i rin chen sgron me* ; (rang 'grel) *Grub mtha'i rnam bshad rang gzhan grub mtha' kun dang zab don mchog tu gsal ba kun bzang zhing gi nyi ma lung rigs rgya mtsho skye dgu'i re ba kun skongs.*
- C : 『教派論』 甘肅民族出版社, 1992.  
 K : *The Collected Works of 'Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje, Reproduced from prints from bKra-sis-'khyil blocks*, pub. by Ngawang Gelek Demo, Vol.14, New Delhi, 1973.
- Grwa sa chags tshul*      Phur lcog Ngag dbang byams pa : *Grwa sa chen po bzhi dang rgyud pa stod smad chags tshul Pad dkar 'phreng ba* (四大寺及上下密院史), 西藏人民出版社 (Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang), 1989. Cf.東北 No.6194.
- dGa' ldan chos 'byung*      sDe srid Sangs rgyas rgya mtsho : *dGa' ldan chos 'byung Baidūrya ser po* (格魯派教法史—黃琉璃寶鑑), 中国藏学出版社 (Krunng go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang), 1989. Cf.東北 No.7039.
- rGyan bzang gsung 'bum*      *Gung ru rGyal mtshan bzang po'i gsung 'bum*, 3 Vols. (先哲遺書, Vols.36-38), 百慈藏文古籍研究室 (dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang) 編輯, 中国藏学出版社, 2007.
- lCang skya grub mtha'*      lCang skya Rol pa'i rdo rje : *Grub pa'i mtha'i rnam par bzhag pa Thub bstan lhun po'i mdzes rgyan.*
- C : 『宗教流派論』 中国藏学出版社, 1989.  
 P : Tokyo Nos.86-88.
- 'Jam dBu mtha' dpyod*      'Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje : *dBu ma 'jug pa'i mtha' dpyod Lung rigs gter mdzod zab don kun gsal skal bzang 'jug ngogs. The Collected Works of 'Jam-dbyangs-bzhad-pa'i-rdo-rje*, Vol.9, New Delhi, 1973.
- rJe btsun grub mtha'*      Se ra rJe btsun pa Chos kyi rgyal mtshan : *Grub mtha'i rnam bzhag.*
- M : rJe btsun Chos kyi rgyal mtshan : *Grub don sa gsum*, Mundgod : Gajang Computer Input Center, 1999, pp.15-44.  
 S : 東北 No.6862, fols.1-15. (Se-ra edition)
- Dung dkar tshig mdzod*      Dung dkar Blo bzang 'phrin las : *Dung dkar tshig mdzod chen mo* (東噶藏学大辭典), 中国藏学出版社, 2002.
- dPag bsam ljon bzang*      Sum pa mkhan po Ye shes dpal 'byor : *dPag bsam ljon bzang,*

- ed. by S.C.Das, Calcutta, 1908 (reprint : 臨川書店, 1984).
- dPe dkon tho yig* A khu rin po che Shes rab rgya mtsho : *dPe rgyun dkon pa 'ga' zhid gi tho yig Don gnyer yid kyi kunda bzhad pa'i zla 'od 'bum gyi snye ma. Materials for a History of Tibetan Literature, Pt.3, Śata-Pitaka Series, Vol.30, ed. by L.Chandra, New Delhi, 1963 (reprint : 臨川書店, 1981), pp.503-601.*
- Bod yig tshig gter* *Bod yig tshig gter rgya mtsho* (藏文辞海), 3 Vols., 四川民族出版社 (Si khron mi rigs dpe skrun khang), 2012.
- BMTT Gung ru rGyal mtshan bzang po : *dBu ma'i stong thun. rGyan bzang gsung 'bum*, Vol.3, pp.177-350.
- gSung 'bum dkar chag* *gSung 'bum dkar chag : Zhwa ser bstan pa'i sgron me rJe Tsong kha pa chen pos gtsos skyes chen dam pa rim byung gi gsung 'bum dkar chag phyogs gcig tu bsgrigs pa'i dri med zla shel gtsang ma'i me long* (布達拉宮典籍目錄), 西藏人民出版社, 1990.
- 赤沼[1981] 赤沼智善『仏教經典史論』法蔵館 (復刻版).
- 北村[1962] 北村甫「チベット語ラサ方言テキスト : /<sup>h</sup>drum/ sgrung (1)」『二松学舎大学論集』昭和 37 年度, pp.1-16.
- 小林[1988] 小林守「形象真実〈一卵半塊〉説について」『印仏研』36-2, pp.101-107.
- [2014] 「パンチェン・ソナムタクパの言及する“sTong thun chung ba”について」『印仏研』63-1, pp.99-106.
- [2016] 「中観派の“帰謬の反転”をめぐるケードゥプの所説」『インド哲学仏教学論集』(北海道大学文学部) No.3, pp.1-63.
- 佐藤[1986] 佐藤長『中世チベット史研究』同朋社.
- 『蔵漢』 『蔵漢大辞典 (Bod rgya tshig mdzod chen mo)』民族出版社, 1985.
- ツルティム/小谷[1986] ツルティム・ケサン/小谷信千代『ツォンカパ著 アーラヤ識とマナ識の研究—クンシ・カンテル』文栄堂.
- ツルティム/藤仲[2001] ツルティム・ケサン/藤仲孝司『ツォンカパ 中観哲学の研究Ⅲ—ケードゥプ・ゲルク・ペルサンボ著『深遠な空性の真実を明らかにする論書・幸いなる者の開眼 (千葉大論)』和訳と研究 (上)』文栄堂.
- 西沢[2011] 西沢史仁『チベット仏教論理学の形成と展開』第 1 卷 (東京大学提出の学位論文).
- 羽田野[1954] 羽田野伯猷「カーダム派史 資料篇」『チベット・インド学集成』第 1 卷(チベット篇 I), 法蔵館, 1986, pp.46-191 (初出:1954).
- Ferrari[1958] A.Ferrari : *mK<sup>c</sup>yen brtse's Guide to the Holy Places of Central Tibet*, Roma, Is.M.E.O.
- Onoda[1989] Sh.Onoda : “The Chronology of the Abbatial Successions of the gSañ

phu sNe'u thog Monastery," WZKS 33, pp.203-213.

Roerich[1949] G.N.Roerich : *The Blue Annals*, Calcutta (reprint : Delhi, Motilal Banarsidass, 1976).

Tucci[1949] G.Tucci : *Tibetan Painted Scrolls*, Rome (reprint : 臨川書店, 1980).